HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 『生誕百周年記念シンポジウム 知里真志保 ： 人と学問』 開催報告 |
| Author(s) | 佐藤, 知己; Sato, Tomomi |
| Citation | 北方人文研究, 3, 77-79 |
| Issue Date | 2010-03-31 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/42940 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | JCNH3_006.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 『生誕百周年記念シンポジウム 知里真志保 ── 人と学問』開催報告

佐　藤　知　己
北海道大学大学院文学研究科

アイヌ民族として、ご自身の言語、文化であるアイヌ語、アイヌ文化を研究され、本学の教授をお務めになられた知里真志保博士は、1909 年、北海道幌別村(現登別市)にお生まれになった。2009 年は博士の生誕 100 周年にあたり、2 月 22 日、生誕記念シンポジウム『知里真志保 ── 人と学問』が文学研究科北方研究教育センターの主催で開催された。

北海道ウタリ協会加藤忠理事長、文学研究科望月恒子研究科長の挨拶に始まり、本学教員および外部講師による次のような発表が行われた。

津曲　敏郎（文学研究科、言語学）「民族自身による言語の記録と研究」
桑山　敬己（文学研究科、文化人類学）
「アイヌ研究におけるネイティヴの葛藤 ── 知里真志保の場合」
谷本　晃久（文学研究科、日本史学）
「知里氏の民族誌研究の可能性 ── 近世蝦夷地の漁場儀礼分析への応用の試み」
加藤　博文（文学研究科、考古学）「知里真志保の描いたアイヌ学の構図」
佐藤　知己（文学研究科、言語学）「知里博士のアイヌ語研究 ── 合成名詞の構造をめぐって」
山口　　真（日本社会教育学会名誉会員）「樺太時代の知里先生」
横山むつみ（NPO 法人知里森舎代表理事）「アイヌとして知里真志保に学ぶこと」

津曲講師の発表は、少数民族言語が危機的状況にある現状に触れ、少数民族言語の文化的重要性を述べ、言語の保持の緊急性を訴える。その上で、言語の保持における民族自身の主体的な取り組みの重要性を自身の豊富な体験を交えつつ具体的に解説する中で、アイヌ民族の研究者として知里博士が果たされた先駆的役割の意義を浮かび上がらせる。氏自身が直接関わっているウイルタ語、ウデヘ語といった諸言語における事例は説得力に富み、アイヌ語の事例を考える上でも大変有益なものであった。

桑山講師の発表は、文化人類学において近年問題となっている「ネイティヴ」という概念を念頭において、知里博士の学問的位置づけを試みる。「アイヌ民族である」ということと「研究」ということとの複雑微妙な関係について意欲的な考察がなされ、ある意味、これまでの知里博士に関する研究では扱われてこなかった側面を扱う。知里博士の内面に深く迫る試みであり、今後の新しい研究の方向性を示すものとして、興味深いものであった（なお、ポスターではタイトルが「苦闘」となっているが、「葛藤」が正しい)。

谷本講師の発表は、知里博士の幌別における民族誌調査を取り上げ、そこで詳細に報告されてい

る事例が、近世蝦夷地の場所請負文書の研究において有益な情報を提供するものであることを指摘し、具体的な事例として場所請負制度下の漁場年中行事を取り上げ、知里博士の民族誌研究と日本史学による古文書研究が相補ってこの時代をより立体的に描き出す可能性を示唆する。知里博士の研究の意義を他分野の観点から見直すもので、新鮮であった。

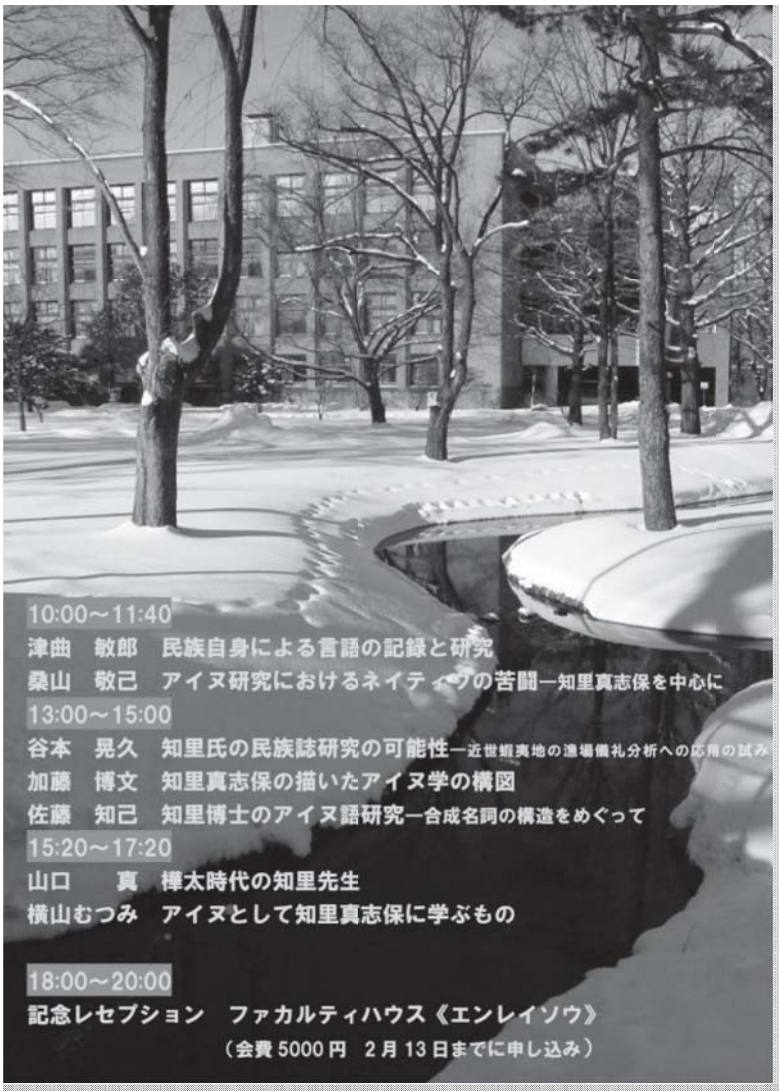
加藤講師による発表は、知里博士の生涯を、研究面から詳細にたどるものであり、知里博士の学問がどのようにして形成され、どの方向をめざしていたのかを実証的に論ずる。具体的には、アイヌ語研究を次第にアイヌ民族史研究へと深めていく傾向を指摘する。知里博士を理解する上で欠かせない視点であるように思われる。

佐藤による発表は、知里博士の『アイヌ語入門』(1956) の所説を紹介し、その画期的な学問的意義を述べる。そして、その後、その所説がどのように修正され、現時点においてはどのように理解されるべきかを述べる。アイヌ語研究における知里博士の業績の意義を、その問題点とともに具体的に解説、評価したものと言える。

山口講師は、知里博士の樺太庁立豊原女学校教諭時代の教え子の一人である。樺太時代の博士と家族ぐるみの親交があり、博士に関して、あるいは当時の樺太について、印象深いさまざまな思い出を語る。直接博士を知る人ならではのお話であり、不世出の学者であった博士を身近に感じられる興味深いものであった。

横山講師のお話は、親族（姪）として、身近に接した知里博士についての思い出である。知里博士の御両親（横山氏の御祖父母）の、博士に対する態度などについて、印象深く語る。ご親族ならではの、陰影に富む内容で、伝記的にも貴重なお話ではないかと感じた。また、お話の最後に、詩人渡辺ひろし氏の詩「バスで見た知里先生」を朗読されたが、朗読を拝聴しているうちに、アイヌ民族として苦難の時代を生き、一高・東大というエリートコースに進みながら、あえて困難なアイヌ語研究の道を選択された知里博士の御苦労が胸に迫り、来場者一同に深い感銘を与えるものであった。

シンポジウムの来場者は約180名を超え、大教室のW 103教室がほぼ満席となる盛況で、現在における知里博士に対する関心の高さがうかがわれた。また、博士未亡人、お子様方をはじめとする御親族の方々も、折からの悪天候による大雪のさなか、遠方も含め、各地からわざわざ御来場下さり、しかも、終了後、シンポジウム関係者を温かくねぎらって下さったことは、大変ありがたく、かつ恐縮の極みであった。なお、本シンポジウムの成果は、発表者のほかに新たに執筆者を加えて内容を増補したものを北大出版会から刊行する予定である。最後になるが、本シンポジウムの開催、成果報告書の刊行にあたり文学研究科より補助金の交付を受けた。関係各位に深く感謝申し上げる。




# 生誕百周年記念シンポジウム

# 知里真志保　人と学問

日　時：2009 年 **2** 月 **22** 日（日）10：00～17：20

会　場：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟（W棟）
W１０３教室

主　催：北大文学研究科　北方研究教育センター
後　援：北大アイヌ・先住民研究センター

**参加自由**
**無料**

☞ 駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

問い合せ・レセプション申込先　✉ tomomi@lit.let.hokudai.ac.jp　☎ 011（706）3049 佐藤
北方研究教育センターHP　http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~b20232/framepage1.html